源氏物語 二

源氏目録 三

十九 花ぬすびと
二十 さわらびの巻
同下
廿一 かしわ木
廿二 よこぶえ
廿三 すゞむし
廿四 夕きり
廿五 みのり
廿六 まきばしら
廿七 わかな 上

此巻かわ中将ども

帝國文庫

源氏年廿の冬より冬までの巻
同廿一の冬より廿二の春までの巻
同廿二より廿七までの事
同廿八の巻月より秋までの巻
同廿九秋より冬までの巻
（夕きりこれなし）
同三十秋より冬までの巻
同三十一冬より秋までの巻
同三十二冬より雪までの巻

并 ひくい
同 竹治
宇治十帖

[illegible]の神ふまう名は友のそら
[illegible]人かやいつるはさらん
姫君のこころみちいさなるふうの衣れはあそふれと
いつさいくさうさうの神[illegible]
あさ[illegible]それのあそれ
いつこそさたのやうちの
[illegible]
あさ[illegible]
[illegible]いつそうらいおもうれいおそうらいる
あさ井るこそ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]神の一つそ紙
[illegible]
[illegible]
[illegible]

みの河てまつじまえの井こにてくら馬のやとく、み月
のせちえにはうひつめてうかふえるれちんてう
うほうおつまえ大ちかのはらんよひんくのいけま
ろてうかいくもやてうちいさんるくいうくみの
ゆくちふ小なにうるとなまる一ほういまうとう、
なおのとけともうをこ馬をもちそんてんのふ
いんくうち清おこ出くみくれとふひさまにいく
そくと大政大臣おかせうけるうにをもふ
てくておものふうにるくれみえまま
いくでくこそそうにはちうるわの音、
はてふれうる院のりおいふくのはてくいる

うんをとる会うんのうえまうえいつの事
うそ大きみくらうえ(私)花乃(この日十六の町
また中のるいをくうて中うんをひくそこをの
つでそれく少後せうおをるをふ今のなるふをいふ
みんのはうきれ市こもうだのうしめうら
うえ氏ちもーせ院いうとあるの院
い筆をおくおうもいきうとあるの院
わかりいはる

多はうまうんのさくもわくい

(添え)
神うちゅーれをくうー
(右のような院のさいなきまくーうをうー)

大きみくうのおいれわまうえいうい事

おなじいろか

ひさしたのつまふかき菊のそば

大政官

ふるさとの花のうつろをみるかなをそろもそろのくさ菊よもろう

右京大夫

秋をへてくものなみだやうつるらん

うつりもみちぬ袖のおくにそれ

世のはかなきやうるいおもへば

みて

そめしひろをやうるいおもへば

ひさしをはなれぬ源氏の院いあけさもろいろうそれた

いせ大輔

ふりにけり

右京大夫の入りてうやまもせうそ　おもくれいは

それいの手ばのかいそ　ばくてをくこさかあいうう

ひそくいおもとはらる　あそちいそくこさをおさ

なう女ぞとうおうてまた　その中よせんていの源氏

ろう女のおおそかれる　多乃

小弁はらみてうわきまお　むのひきえう

そのおて小弁十二はうふおいをる　なうおもいけ

なをよそくいさ源へうん　ひろのうた四条

なてあんまあつけおそ　ひをそそもういやて　あお

等つけくおうかく　ひろのそうへ人と

あまさかう　そ大あう

しや院のみつさ源まもい　ひまをみのな

ゐそうろう、以ま
みおくるの名ごり
人ゝとゝゐをはいて
の大臣ちやうの
うんのつゝみて
ゐそうろうて、以
わくらはそれいかり
はれのうにさうろう
なり、以女このよの
いそうめいくわう
の君ていふ女房ゐて
さればるく山家の
うろうにおりそうろう
そうふるひなさま
そうくとけちやうい
ねぬ中ふうろう
けくれそうろうと
ちやうやう院ちまい
うろうくみおくろ
のうろうだ

おなじ 門おくりむすび

の君ていふ女房ゐて
さればるく山家の
うろうにおりそうろう
そうふるひなさま
そうくとけちやうい
ねぬ中ふうろう
けくれそうろうと
ちやうやう院ちまい
うろうくみおくろ
のうろうだ

おなじ 門おくりむすび

あをぬとと
はけのおくしそかみさしみあるは はかりやくにやそ よみもうりてさまれ えしま仏り

院は御出家しつまて御出し

若菜

はつねふころわかなよまゐるは紙

はるのおくれらみさ御まて 仲よのさつきは女こをとんなんや

わしよろこひ法くすひく御人物けしういあしとゆうり

ここえのまよかくけよおもしきのんさしや

あんわといおやうろやのすおもて しきいいまかいうしきといふなや かく御ゆ廿すなて三日めうもく院は

ゆくしおろアすひくる、院のさしすくのかいむちくのおえゆり

こ人さふついて、かふつすてまうかく女御かくい三よゑ

ならゆうりみちくるたさつてかく似あいさくしそのはと

ゆうし六条の院まいりまく給はつくに女三乃よ紙

源氏よおやさ御よ四十うりあ人奉しさくまれつと、めそと

まひし人くいいろうしならし、廿せ紙まうかく名はく給奉

そ六条の院四十の御かゆ忠なら御せいのうさうとうまいれ、

よ紙ゆま廿て表れはしやうう紙なはとていく、いうわ

しれるすしもあはなり、正月廿三日ねの日うするふ、玉かつ

はるれうんの君御かなまうるく、本ていゆうねうんとより

くろめそはこひまうして御さしれまうつりれらう、おさわの

はく忠十三さそて、すりうあれ御忠ゆうそくのくこおれ

うう又ういし四つかは、御うさりたいゆとうはさ、かけ

乃えこ ひんの くらり みかちんしんもうる○こう物そ気く

にいるささうろくのかしいう四十えろさ はひきそわの へさるゆと おう

いつことものてわそのまみこちうんとんを
うちまそ院の人てのうわくまいうつて、ほいそた
まへてそ、立そ院いまうたのようほたいうんをちんのあり
しきそうて、ひつるをねいうまうけまうて
ひけうれ浦るいたうこうけのみうて
まへはうのうたなり

源氏　これうすえのよう
ひとへのうちみてつむいを
ひとつゆうありうきみそうんの思いうちまかて

女こうえ二条の院にうりまま来きたる十日のうち
なり紫のようそまちはつそみかりこうれそ、そう
よりつそこうみうれいかく多にてうこうを
ひとうくうほたら世のやと
紫　ありすえくうきそのをはうれ

源氏　いのちをうちなのちうれ　いのちたにうしまうまれこうちうよ
よれつのかわなく源氏いれつまた雪　よのうちのようにうちうれ

三百のうた女こうえ二条のようまへ
ふうえあた桜のえはほて四月
ひとつ　ゆうちてほうけて四月あり
こうえうえまれ　かうこのうえ四月のあゆと
ふのうちこうえうちうあり

ゑりいてんあっつきらくなるう

今そみよの若うえは

そ日ゐえう心えさそ

くのこゐうにどとのねもよ

それおくりのまるうくなおて

て二十人ほうちせこ

してかくし一人まに二人つま

ふ、ちろ〜めそ、け男をたとそ

あさうなるあそうあとそ、

うえれいおま表ちくふろられそのまな

花して徐をくしうりけこをい源氏うけう

のまるて二条院よ帰りあて女このえれて

ろんてんれおそあり、帰りあのゆきわいそれてようる

うまのなくおそふるあう心ちいさ

の中将をい大将とどうり源氏ちも公

けてやうありとそよの人まうえれ大将

わえたえんのこ心ちおあ

方のやふちりうれい桜いよれそんとそちまえ

て大将とえんれうこえほ一のうれるのな

ゐおあう、折う女このえ乃内

よう、かねこのちいさくろてきよ、えまさ

又ことに初ことも
おも
いそぢあまりいつ
（みそぢあまりいそぢをいふ）
法せのほそもとみたまをれてこゆるそでの
よいろうつくしくのこりなく
くゆるわれもそでいつ
ろくこみやうこと
よをふるまでおもひ
そうんの
おうちうしまで
今はかぎりのゆふ
こそう
ねやのわかれをとそう
いとせめて
仝廿四首
同
仝
仕方なくおもひ
沖かとそうをはあまり女ちもいかあるく
ひとなりおもひ中納言ふ
あく女このゆふの女この女を
これいけろれ
まろ一条れるとおもひ
るさと女この仕事
くみこのをもそうよろ
あろとうよろこ
そんの
こいろうみてるを

紫
世尊
中務の宮

あけくれのそらなつかしう思いおこさるゝ

三ぐんのこと

　　夏なれどくらうとみくもやしづく

あくる日はまうでたまふ物どもおしそそくさしたゝめて

きこえやりたまふ

　　くもゐにもおぼつかなしや

　　秋のゆうべをおかさうけるあさけしきを

　　女二のみやの大そのつぼうちにおはすのこと

ふくいろもいつもいつもをしなべてうすくこきをりあはせたるうへおかしうすさまじきほどにおはするをよおはさうらちさきらひたまふ

　　ゆうべのあらしおもひやるたひころも

ほろほろおちるなみたかな

ひろこうゐんのこと

かやうのことどもをきゝおはしますにつけても

その御ありさまの（ひろこうゐん）ひとこゝろ女二のみやおもひきこえたまふ

ことさらにおのけちえたまふをうらみたまふ

我身ひとつのうきよならねば

　　それもうらみ給ふ

とおぼしなをるにもなほ思ひのほかなるうきをぞ

源氏の院御ふくのことなどいとこまやかにおぼしやりてかくいとあはれなるついでをとらへたまひてそのかみのことをもおぼしいでたまふ

　　秋のゆうべのことを

のこりなくおもひしられてかなしきにそでさへつゆのあくるまもなし

十二月二十日あまりのころ

はゝ人のなしよりてさはゝくこよのしみよいし大将
はし一条のみやらくの上をゆかよしろてかやとむ
秋のころおのへれりてひえの山みてうてるはいの
あしれきや紙しやりしてまへみやとむのはいのて
のさわなり大将いおのへしけりきてりおわりこえ
えうれるれとも。ゆへあうさはよすみすして衣へて
その夜いおのよ大わとはりるねんとて人ならして
じましもそいくうとれ夕人しやうちうらんよはりけせ
おのことも入てくこはくさとりりせらんやのうい
しゆへくるとのおれしいくう夕さりにありあらて
のれいせしゆへありえのおのくいくう夕さりのおれ

いつまてよのふよりてうなへくうはていまてかうる
太わ
山さしにおくれをそうる夕さらふ
あらいてんそくしなれ白地して
ゆくれ
おもく
かよみうひしゆへ夕さらの太わいくう世紙も名付より
山くわはうちこゆくそろきらのも
うろうそわる人いとしやて
あうまちそうるてそうさやの人に
とうそと
その夜らうさよりて年比の白さしれれて法よへれ
あらく
秋のこやられ世紙たわら南わしはく
ねもそよ袖のうなくてまへさ
和やたもうなて仰
られてしはりいゆう
のるまへてさくさへき
ゆれそよいうやいあて夕
ミちうとしてをあえて
とあさ浜しうすへい
太わ
太夫いつゆれさえをさせはとし

さて月をうらみんよりはの
　　あまりあらじをもろともに
くもゐのそらもおぼえつゝ
　　まつ山のあまのあまでを衣をしぼりて
　　わさうくしくもやそ
うらしろのそでをしぼりつゝ
　　しぐれてはいそ
　　袂あれや君松ふく
　　なみだと松の
　　何ものせ松ふく
　　うらもみぢ

かの名さうの江おもしろの
をぢのよにゆきゝものまでさく紙のく
けりみてこゝろをいてくる
ふをれいきうへさう

　　松ふく神の
　　人のうへぬ
人の世のうれをわれ
　　月いうへんとはおもはしを

　　廿二首

廿三　みのと

世のとあるやうにゆるやこのはかやをとわる

源氏

まくとくりわりなかりし世は

いはくもはいのこともうかし　いつくもうきの世 ありても

よくのはあらさはいらぬしけなりしかくおもひさ侍よ

おもうしゐまさるもあはれそ身はよそになる

ゆふのと

かくしかけるのれそなくよう

うけうし花のくれさふみと

卯月一日小は御衣かへ志まして花散里よりまゐらせ

夏のはて

夏衣たちかへてける

うれしさもすみやかなれ

はなやし源氏

は衣のうらをかへすらんて

うたせての世そいとくれしき

かく花のまつりの日中将の君へいふおもひを

まちさる源氏は日ころそ何となきのうへは

中将の君

何もなそいふる人ののみみえさいふ

今そのうさしにおさへ何と侍

源氏

大かたはかきいけさくてしまれしと

あつかいさなやたにさうとくさ

此中将の君かみのうへもそれおもくやうふおもしけ

なる紫の上にも申さる御えしまふひさきたるまひ

まんとかく事あり

たいくのうちいくいく左馬は七十二才にそあつくる

そのあくらおもいそてるまゐりはあまのうま我ゆかくる

九月九日のこと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏

春ごとのいろもこころもわすれねど
　色ふく梅をけふぞ折りつる

かがら

　千世ふべき人のためにぞ折りつれば
　我みそゆきてとをもとめぬ

けふみつのそふおもひもせのこまつ
　ちとせもふとも君ぞ忘れじ

紫の上　梅と桜とゆうもうつりて、おくい仲ふも
　まうすべくいみじうおもしろきをり、ぞう
　のいでいでそれをちとさし、木ずえうつ木千代そ
　みどりに風も吹よりしのの

大宮　大ぞうおもひけるの神もうめ
　そふさくえをちとさてもちん

かいてくれの名もおもしろくそ
　あのちとそれ

源氏　物ずきすぎ
　かくもひろきをやどをかる
とよみのこにはそれなるべし
つとをんみとちとの少ひとそれまいもめそ
ちとそのこおもいでくれをちとん
ちとそをおいてくれ
まうふかてれて人のもんぶい

廿七番　かくれい

世こそあんだちの大納言きこえ給ひしのおく
のこと也そうかいまはむかしのことなれば
なり姫二人ともにきこえてよしいふかひなし
くろれいしとおなじやうにて人の心ざしの
そのほまれそらごとのごとくにてよみもしらず
うれえたれ小野の方よりおもてむき一人
もちもらひをいだしけふかしいそぎ人を
侍従のまへとおぼしきかたへ大納言
のうへにてよませ給ふとて三重紙七なんの
そうえんにいろくをそへて玄の姫君の東方ろん

ゆくへなきあだ人ものゆきをはらひやらじとや
あるといふかけねのうゆきなれどもあるかひなき
のみそかしとおぼしきをそのとき玄上家の侍従
ことにさいはひをまいらせなりけり

ゆくへなきあだ人ものゆきをはらひやらじとや
あるといふかけねのうゆきなれどもあるかひなき
のみそかしとおぼしきをそのとき玄上家の侍従
ことにさいはひをまいらせなりけり

（原氏の出てこおりくいまさかいはのことかのうふかタさうらいれよとふこうくあること）

ほとゝぎすそもそもいつのまにかはつねをしらく
かくちすさびふるまひて心をたのめ
ゆくへなきあだ人ものゆきをはらひやらじとや
あるといふかけねのうゆきなれどもあるかひなき
のみそかしとおぼしきをそのとき玄上家の侍従
ことにさいはひをまいらせなりけり

ゆくすゑ　　ゆくすゑ

いろもかもわかぬ人の心かな

かくれ家の主人仏大和言葉にてこころの太平と
けいづまあるべき歌也

四首

川辺竹　竹河　こゝろ

仏古今竹川と名ある事いにしへ絶
えたる川のそれにもあるべく絶
えたるにもあるべくそれをいふべく絶
えたるにもあるべくそれなつまで竹川とよ
べるこゝろ

ゆけどもかれもしらねば

おとこ君こゝろ姫君にこゝろをそめ
こゝろ半ばにあれ院
夕さりのほたる義人のかれ
ず心月前旨趣ありて
半ばうらみ平和の夕ほたる
いろねなきいのち仏古今ほたる
さられゆくさきあだ
あまりこゝろ
ありてえんいこゝろ

よしわの去

まこゝろあれ
こゝろやゝかそそぐ

いてくるをおくりなどするほどに
ある　はなどしてすごすほどに
　ものうらやましきくれのそらも
まいのおもかげにゆきそうまえて中将のきみ
つくるこころ
かわ　いでやかくおもふこころのみだれなん
　人こほけしろくもなりぬ
　まうけやそはそれおもふこころ
いわ　いなうといふこころしるか　ほよそれにうんとも
こうらうらの事をよしむうともなり
みかわ　あくれそれゆうやそうしいれそ

　雪はうすらかにふりたる我方おもてうちながめ
　　ひとりごとにて
　如月のあの雪いかにつもるらん我人のおわさぬ
　　ほうろうのうらそうしろ
かわ　花ぞこぞくけるいそのかみ
　ふりにしさとの雪をみるかな
ゆき　雪にそむるそうしろうとも
　それこうろうをうつろうとも
　花人のかたよりおくれたるにはあてなしとう
あるま　あくれてよりは世のひとも
　いつるる人のかりかるものを
　これをうらふいつくみすいはうそ

いけうよれそめなほりやわい

きうてやるまん

そうくいんてもの月九日院つまうまくいかいれうか

そそのきめてそろうまくいうちのさんそうそうを

かうみんく

てふうそかわわてあいふうちれそる

まんぼうこゆうそ

そてそをこあけこれけきいてあやしめくし

ふろうそうくみすかゆきい我ふうのふよのそ後

てかわろうそ

はいそれのうやかうてうちれそ

こうつこそそ

比女市のゆうそ比女二ろそ

いせん院ふてふかつそすま

このし中そそ〇ゆきま

比姫まいんいまうんはてそ紙ふようこはあふち

をもて作れをまい中の表ようのうまる

内わのうそ我ゆうそ内ま

うくふあそそはそさてうるいふそや

おりてまろ女市のゆう

市和の女うよろうう

竹川のそのよろてまいみいはや

一 はし姫
二 おいらもね
三 ゆけまれ
四 さるもし
五 東うの木
六 あんまや
七 うきふね
八 くけろよ
九 てうもい
十 美のうれて

そのふうれよて
なうれくのそれろ
ふうれもしめさ竹川よ
これのうれ木くの事くしまて
いつこいけろう事るう、なさらのみくいてる
いやうとみかり
ひよサ江首
花のうはるを竹川まそ十二帖はかあり

宇治一 はし姫

宇治のはし姫といひし事は源氏以後の事也けるを
をはしめとして名たかくはいうそくの文は此もとめ
さらなれはみてしかはすみかひしそうかる中納言よく
ひあはまそへて前によろしきひしゆへなるそのは世み
うとまへられあはぬめるか文おいくかなかんはかれ
源氏の御弟なとくなる本上天王の弟八乃宮なり
うられ文けいつはあうらんそくの文もこれなると
此の方は姫君二人うみおきてかくれたまひられ
ねとこうらひしつはしく此姫こそみをそてこそ事み
よの人ひつとの文まして又うくそくれ文ましてを傳く
そくひつをしるやおの姫君さら十いつゝにならせ給へは
大君はひは中の君はさうのことをしへまいらせ
て御さかうかそてはなちさうかなさへさ浪いてるは
やうくきよらになりゆけのあとうのほうひとあられ
ねられぬしくて

父

うちすてゝつかひさりにしみつとりの
かりのこの世にたちおくれけん

むかしなるやうに御おもしのこひしき

姫君

いかてかくすたちけるそとおもふにも
うきみつとりのちきりをそしる

中の君

なくなくもはねうちきする君なくは

廿一首　門弟一そ

ほの去

山ぢのおろけふもかくそを
中の丈
ヲみてしむ秋のうせいあるうき
二の丈
二乃丈の浦方へ立いこそれゆえそこあり
けいかの一条乃井ちそのまの山てなり
二の丈
そこうへてそれそほさうあり乃
いうまおくるおこうなるこん
夕そうおちそれ山方かを三条の山いそうるうく
中の丈
まるほくかいるふ中のまいこそのなくにも
ふのうけやすいやほ
中の丈
大そふきそうほしもの
うるうめうさ秋りくれうか

ふおいうのおやうかをそれゆうそんをいそ
さいそそうんちの老そ山ふそ人のうえおりてう
あるうるる
中の丈
うちそう世ゆうをれせき川を
ふるれそうんおそれうれ
ゆうちにうるるあるゆうた
そそのかいいうあるゆうた
うそ山大将あうそれ中のまれおその山へそうく年
山ふいうそふ公のそ式かこうとるれくいあり
しいれゆおそいそ中のまれ山ゆうにそゆうける
いうたにそけはるうちのはるうけ

六　あつまや

この君は紙中の君と契りて

うちうち　又人のかたらふそれをも

きゝてやれるそれをも

みそれうらやましくきゝて

はの君　身にそへかけやうたのまん

けこの君はひこそんとんうちのかつしす

ちうしにきゝて公うちの

みうしそうにてうち屋

うこひこのうち

かの方　ちうゆひこそれうち

いうちうにうはるうちはそ

むこはる　うやきのこそれうはは

けこの君をくそくして中の君のかりふみにて

ひうりみうきうすきうして又はちうへて

まこいのかうれいそうそはうふ出をちうへて、この君

の死うかまのうにかいうちうそはうちうち

かうてかかりて、けなのてうこのうちうの

うふかをくそくしてはこ君こ

ちうにそれうこいうはうあうれけ

いてて

かくみてこころひとつをてもあさはるの

とこるやまてわくかみわ　（枕形去のかくこそ）

その夜のまゝ去のこころひとつをてもまつこする枕のそてに光

こるあくにおほえぬ月をあかてこゆる紙

そこるまくいくいおいそれおこころめれ枕るれと

（ほんのまゝ）

雨こり木いまうらめれ枕るれと

もゝくみうくてまる月るか　（去うりうるいの去こそ）

はこのみをもつこうくうそくて人の

おもうこともれ秋やの月新　（こそのこころれこうくて去

ありのまゝ）

（ママ）

三十一首

七

ふりてまいなのこみまけをはれ

こおかすふそこうくて正月二日こちよこくく

みこりのこともなる法こうふやはこちるかつ

（ママ）

いけこふのんくこそ去こ

ねさそんこりもこそんん　（やうないれやしまうこそるん

いこうをのゆくををねこふ

つねめこふうこもうこり）

ほこうわれよいあれて去こ

（おつまや）

ふうれこりまこ

いてまうるれ女のてふふこえすくこて人のこ

まてこうこうそ空法のあんるいををそこ

ねのいくおいてのそれて去る人は

まてんとのこと
とある武士にあてそれのさうしく
てしまをもつものやうにふるまい
ふうをなすとうかるさまをみてくすくす
わらひおくれそれぞれのおもうのあ
るうちのこゝろをしりてそのあをさしてすゝ
こゝろをとゝめおそれてあるべし
なまよくろうのおんなにこゝろ
あるうちのおんなをおもうこゝろ
そうこゝろをとゝめおそれてあるべし
卯月十日京へ

しそうにてゐるものもそれをのこゝろ
ふかくおそれてあるべし
あをみさんふのこゝろ
あをみやうにそれをさそうて女は
あかりもしくまいおうさの方をえやる
さまいうに人のそれをいたそこいて
さうのそれをしまいくそれくこゝろ人をいま
多くまいそれをさんさうにいうこゝろ
人来いんなうへとそうおもいなるさこい
ふいおもものいそこくくとおいさけるんとするふ
ものいそこくくとおいうまいこゝろ

かくれふる世のなかにこそ
いけるとそおもふらめ
女のもとへつかはしける
みをそてふ
あふことのなきにつけても
みをそてふ
なほこのいのちたえぬれは
このよりやへんとこそ
いのちにそまたれける
うれふ
かひのなきたにあるものを
我世はさてもありぬへし

八月ばかり
宇治へまかりけるに
あの君おはしけるところに
秋のつとめてつかはしける
ことなしに
もろともにあはれとをみん
秋の月
いつこのあきかわれをとふらん
返し
ことなしに
ともにあはれとをみましを
秋の月
いつこのあきかわれをとふらん
ことなしに
ともにあはれとをみましを
秋の月
いつこのあきかわれをとふらん
返し
ことなしに
ともにあはれとをみましを
秋の月
いつこのあきかわれをとふらん

さてほほゑみきこえさせんやといへは

ゆかしかる

風とかくは一葉を稲すん大なさの

花ようつんやなりとも

うれしみの君乃ほてざりおはを彼めやふをつひまへ

ゑもころ〇のつかにこう〇を入くうらんかまくにたり

りしまへうちんかやさしみせうほくころうかかるたく君

ぬるへも御つとあうたくの子ともをはみかとやとらわ

へさようく行もされはわれきみもう拂くらんなく

あつていくきけく御使いたくの大まちのふうれはお

くり柚ようれえんさいのおびさら紙うれはうれ子乃

御あつさしなりとそどう召さり

ろんさい
くぜんや

夕歯くれ

うせろふ乃ゑのえろふけりしとひちろふをほく

しやくなりめく

ありやのてみはとう秋をうれえ

ゆく忍も志つ徒さしくゆけるよ

かけるやくらんてそろふくよしとし秋の夕日かくにとれちふてにそさまうのの心へそにまへさう

かりる

此所ゆへは忠紙名付さり かりるの御おち武部心の

ゑときこえしと此事にうくれまへは言いつよりけ

ろよのおきふきゆつの言とあり

四十一首

九

ねうし

うれみの君を身をうけさはとそ彼もくうけさ

御らひしゆくとさやうふそ剤し身をふへんとく

まくこもれる水のしたみよ

こんをうふとやしれとえいそうろうおく

やあるれんもも居いるをうふもとねねをと

秋のかぜれをうけきぬうけ衣

ふくう

中将ふさこそうそいるとひてのやなふ行るよ

ゆくえいそうろうかやとかそなり

ぬうれ世の月とあくれやくれてこぬ人や

同

屋まのはうれやくふるめ

ふかいるまて月代詠そん

まわ

秋やのいそ

秋やのいそねてくれのいまうそのゆうべ

ありやとうかふこと

ゆうふくれそうろうかとてやをそそうろう

ふくう

かくいひてのまま

ふえ秋もうそ

同

ねそさぬ秋そうれふ

なんすまそ秋かりそ秋計ふ

しんちうなみそとあうそてうれふ

ふえの秋よりて

ふくう

うそうそうそ神そわれふ

今えのうしろの秋もとのうれてうそおそそのねりそ

あまそそうそよまうそそいうふうれそ

まうそうれ

けうおそよふうるりのうれせい

そうそもゆう二もやそ乃秋

かしてるゝいようれをあま君又つきて二もをそ
まさもあいさこてんとみかを人あるへわ白つま
事をいいあてあへからうあるあいさをさこう
二本の枝は本ちいそ称も
ことあへ人さてをこん仏（すこものしそと）
仏そのわをらとこうちいて仏地ちや陀そて
ゝるこ我てあへおこ渉
男をへこそをあこさとあん仏地
しはとこ夕はくれのれ乃ちもあれちふ
おもいい作事あて
仏我枝のゆ
なうもを神
月さ出おうきふひるみちる中将おい
ようとのるうたてをおこ入今中おいとあうみあを
山作の枝は表
おおへ人をお
あま君さ人おりそく陀
いてよ作ねゆうんおて
うれおとおいて
ものゆへ人て
仏それもと作ない
おいそうあま君すのまふよ川のそうち京へ

紙数

九十九枚

源氏一部の分数

碁合七百七十六番

同引分

碁合六十八番

正保四年

二月吉日

三冊の内